

Title	文化移動論(西村眞次著, エルノス出版)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.3 (1926. 7) ,p.149(455)- 150(456)
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0150

國民主義と國際主義 (竹林熊彦譯) 同文館發行

國民主義と國際主義乃至それらの運動は、近世史に重要な地位を占めてゐる事象であるとともに、將來の問題としても重要である。竹林氏が此の譯書を出されたことは、我が讀書界に對する誠によき寄與であると云はねばならぬ。原著はマンチエスター大學史學教授 Ramsay Muir 氏の Nationalism and Internationalism: the Culmination of Modern History 一、一九一六年の刊行である。此等の觀念なり運動なりの本質と、その過去に於る發展とを檢討し、且つ兩者の關係を説明したものであつて、著者は國際主義の將來に大なる期待を有する人であり、「力ある國民主義の基礎の上に於てのみ實行され得る國際主義が實現される」との見解を執る人である。興味と暗示とに富む書であると思ふが、此處では左に著者の國民なるもの及び國民性なるものに關する思想の一端を紹介するに止めておく。

本書の一節に曰ふ「國民性とは定義し難き、把握し難き思想である。獨逸の大學教授の好んで用ゐる形式によつて、吟味されたり、分析されたりすることが出來ぬ。野蠻なる種族主義によつて解釋されてはならぬ。其の根柢は一種の情感である。最後の手段として、國民は國民である。彼等國民すべてが熱情的に一致して國民なりと信ずるが故にと云ふより外はない。然し彼等は若し彼等の間に眞の有力なる親和力が存するなれば、若し彼等が形成せる混和種族間に人為的分離によつて離反することかなければ、若し彼等が共通の宗教信仰によつて植多つけられて根本的な道德

思想を共有するなれば、若し彼等が傳統の共同繼承を光榮とするなれば、彼等は國民たるべきことを信じ得る」と。從來國民及び國民性を論じた學者——主として政治學者公法學者——はかゝる説明を下さなかつた。全く態度を異にしてゐると云はねばならぬ。國民とは如何なるものかとの問題に就いて、諸學者の意見は必ずしも一致してゐらぬが、要するに國民と認むべきもの、具有すべき要件に就いての見解の相異であつた。しかし何れも人民の間に共通の言語が行はれると云ふことは缺くべからざることとしてゐるが、ムイア氏は之をも必要と限つてゐないのである。兎に角面白い見解であると思ふ。

なほ本譯書には國際關係論 (James Bryce: International Relations. New York, 1922) 國際運動史 (Albert Léon Guérard: A Short History of the International Language Movement, London, 1922) の二篇が附録せられてゐる。何れも興味ある論著である。(高橋琢二)

文化移動論 (西村眞次著) エルノス出版

常に新しき試みをもつて清新なる刺戟をわが史學、人類學の上に與へつゝある西村教授は、今般また『文化移動論』を公にせられた。文化の發生については從來學者の間に異説があり、或論者は國家や民族の文化が各獨立に發達したものと考へ、或論者は人類が一の起原から發達した如く文化もまた或一つの起原から分岐發達したと説いた。前者を文化獨立起原説と稱すれば、後者を文化

移動説、或は繼續説、接觸説と稱することができ、さうして後者は主としてリヴァース、エリオット・ミス・ペリー等のいはゆる人類學界のマンチエスター學派によつて唱道されたのである。西村教授もすでに古くから、日本古代船舶の研究から、文化移動説を唱へられたのであつて、今般本書の著あるは、氏としてまさに當然と言はねばならない。

人類が同一起原から由來したことは人類學者の間にひろく承認されてゐるが、文化の起原については前述のごとく異説がある。而して西村教授は文化獨立起原説をもつて帝國主義的影響か或は人類學的無知によつて生じたものとなし、今日においては打破さるべき似而非科學的のものであると論斷され、さうして土俗學、工藝學、考古學等の多方面の知識をもつて文化の分布、文化の移動線、文化移動の媒介機關等について詳論し、もつて文化移動論の動かすべからざる所以を力説し、最後に近代文化は古代文化の繼續であること、また人類も文化もそれぞれ同一起原から發達することから、全世界の生存協力の必要なること、即ち世界主義思潮に基く人道主義を提唱されたのであつて、氏のうまざる努力と凛々しき勇氣と該博なる知識とに敬服せざるを得ない。

文化移動説については、吾々も或程度までこれを承認することができ、けれども、文化はすべて移動によるものであらうか、獨立に起原することは全然不可能であらうか、疑なきを得ない。従つて本書においても處々疑問に逢着するのである。例へば各人種はそれぞれ新石器時代、銅、青銅、鐵器時代を經過するとすれば、各人種間にはたえず順序正しい接觸が行はれてゐたのであ

らうか。さうして更に疑問が生ずる。試みに本書に引用された(第一圖)ノルスの世界文化の比較年代圖を参照されたい。エザプト、インド、支那において、エザプトは最も早く新石器時代を經過してゐるにかゝはず、鐵器時代の起原はこの三地方殆ど同時である。この場合文化移動説は鐵器の起原を何處に求めるのであるか。今日のごとき交通機關の發達したる時代においては、地方の新發明が忽ち他の地方に傳へらるることはあるけれども、紀元前四千年の時代に、しかも遠く隔つたこれから三地方において、ほぼ同時代に起原したと思はれるほどしかく速かに、一地方から他地方に傳播することは可能であらうか。更に質したい。文化がことごとく單一の起原であるならば、人種移動に伴ふところの言語はどうであらうか。今日の世界の言語はすべて單一の起原に還元され得るのであるか。しからばその分化の經路を明かに論證されたい。文化移動説はその移動の經路を明確にすることが基礎的要件であつて、これなくして單に類似のもの存在することだけでは直ちに承認され難いのである。

吾々は一方において文化の移動を承認するけれども、しかし他方において地的環境の影響の偉大なること、人間が創造力を有すること、及び人種は本質的にその能力に優劣なきことを信ずるのであつて、それ故に文化がことごとく移動によつてのみ起原するものとは信じない。何はともあれ、この問題は史學、人類學にとつての重大問題であつて、ひいては思想界に關係するものであり、従つて西村教授の本書は各方面に一大反響をひきおこすべきものと思ふ。(松本芳夫)